

巻頭言

Guest editor 寺井 崇二*

「沈黙の臓器」と称される肝臓は、自覚症状に乏しいまま慢性的な炎症が持続し、やがて線維化が進行することで肝不全に至る。肝性脳症、腹水、黄疸、食道・胃静脈瘤に加え、肝肺症候群など、全身の血管系にも変化が及び、病態は全身性に拡大していく。肝硬変の本質とは、肝線維化の進展に伴う代謝機能の低下と、それに起因する全身の血行動態および臓器の恒常性への影響にあると考えられる。

前号(2025年7月号)の特集“肝硬変の病態と診断”についての概説に続き、本号では“肝硬変の最新の治療”に焦点を当て、最前線でご活躍の先生方にご寄稿いただいた。

まず「治療介入」の章では、B型・C型肝炎ウイルスの排除および制御、MASH(代謝機能障害関連脂肪肝炎)やアルコール性肝硬変に対する介入、さらには肝移植医療に関する最新の知見をご紹介いただいている。あわせて、肝臓リハビリテーションの観点から、QOL(生活の質)向上を目指す栄養療法や、サルコペニア対策としての運動療法についても取り上げ、高齢化が進む肝硬変患者において、どのように包括的な治療戦略を構築すべきかについても重要な論点となっている。

「合併症の治療と対策」の章では、肝性脳症、腹水、消化管静脈瘤への対応、Interventional Radiologyによる低侵襲的介入、門脈血栓や血小板減少への治療、さらに肝肺関連の病態制御まで、実臨床で求められる多角的な対応を網羅的にご解説いただいている。

さらに「次世代治療、技術の可能性」として、肝不全および肝発癌の制御に向けた挑戦的なアプローチにも焦点を当てている。肝線維化の改善、再生医療の現状と今後の展望、そして肝発癌予防薬の可能性についても、きわめて示唆に富む内容が示されている。

現在、肝硬変患者の予後は多様な治療法の進展により改善傾向にあるが、さらなる革新的治療の創出が求められている。今後、再生医療、遺伝子治療、細胞外小胞(extracellular vesicle; EV)を活用した新たな治療戦略の実用化が進むことが期待される。これらの開発に当たっては、肝硬変の病態理解、精緻な診断技術、現行治療の知見の蓄積、そして薬剤の作用機序に基づいた最適な試験デザインが不可欠である。

本特集が、肝硬変治療の現状と展望を俯瞰し、日々の診療に資する実践的知見を提供するとともに、すべての患者の未来をより明るいものとするための一助となることを願っている。

Shuji Terai

*新潟大学大学院消化器内科学分野(〒951-8510 新潟市中央区旭町通1番町757番地)